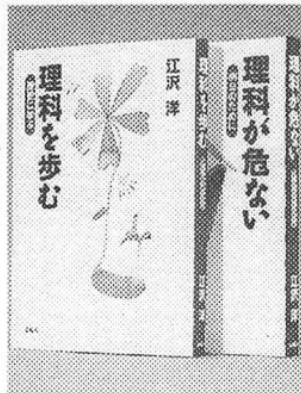


理科が危ない

理科を歩む

江沢 洋著



新曜社・各1800円

著者は九〇年代に日本物理学
学会会長であった理論物理学
者。高校教科書執筆体験もあ
り、中高生が自ら挑戦するこ
とを念頭に、仁科芳雄、湯川
秀樹や朝永振一郎、ファイン
マンなどの業績や著作を紹介
してきた。このような立場か
ら理科（特に物理）学習時間
の大幅減少を憂慮し、理科離れ・理科嫌い現象にも早くか
ら積極的に発言し続けてき
た。『理科が危ない』は理科
教育批判を、『理科を歩む』
は科学史や理科教育論（宗教
・文学論も）を中心に、この
間の論説・随筆に新稿を加え
て編集されている。

著者の主張の大綱は次の三
点にある。①学習指導要領に
よる教育統制は間違い、教育
は教師の手に返す②個性の名
の下の早期選択導入には反
対、体得の道筋は多様である
べきだが学校は万人に共通な
基本をしつかり教える③個性

は学校の授業だけでなく内外
の自主的な諸活動で形成され
るから理科教育の建て直しに
ば社会の学問（科学）温度を
高めることが最も肝要。すな
わち、自主的な工作・実験の
機会と場の保障、特に子ども
から成人への各層に見合った
良質な科学雑誌の再生・創
造、無思考促進TV番組批判
の世論の形成。

以上の主張の根底には「勉
強は教わるものではなく基本的
には自分でするもの」「学問
は自分で紡ぎだすもの」との
学習観・学問観がある。そこ
から「大学の講義を一年早く
聞いても学問形成には無意味」との「飛び入学」批判が
生まれる。

戦時中の模型飛行機少年か
ら戦後の物理少年になった著
者には「僕の人生の半分は自
由に考え、切磋琢磨しあい、
生涯の課題の芽を培えた中高
校生時代にある」との思いが
ある。中高校生への科学推薦
図書の最後に吉野源三郎『君
たちはどう生きるか』をあげ
たことにその思いとの重なり
を読めるが、それは同時に入
試全廃論への疑問や学校群批
判に見られる旧制高校的学校
肯定論ともつながる。それを
含めて、提案には民主教育サ
イドが受け止め深めるべき内
容が豊かにある。